

ISSN 2186 – 3989

源氏物語にみられる助動詞「べかめり」の用法（一）
—会話文における用例を中心に—

坂田 一浩

Usage of Classical Auxiliary Verbs “bekammeri” in the Tale of
Genji. Part I
—Focusing on the examples in Conversational Sentences—

Kazuhiro Sakata

北 陸 大 学 紀 要
第57号(2024年9月)抜刷

源氏物語にみられる助動詞「べかめり」の用法 (一)

— 会話文における用例を中心に —

坂田 一浩*

Usage of Classical Auxiliary Verbs “bekammeri” in the Tale of

Genji. Part I

— Focusing on the examples in Conversational Sentences —

Kazuhiro Sakata*

Received July 15, 2024

Accepted July 30, 2024

Abstract

This paper aims to analyze the usage of classical Japanese auxiliary verb “bekammeri”, which is a compound word composed of two auxiliary “beshi” and “meri”, in the Tale of Genji. In this novel, we find there are some differences in the types of verbs preceding “bekammeri” between the parts of narration and conversation. This also suggests the differences of syntactical function of “bekammeri” in both cases. This paper focusing on the examples in conversational sentences, in terms of the type of events described by verb and “bekammeri”, we classify “bekammeri” in five categories. Through the analysis of each categories, we find that the examples of “bekammeri”, describing events that are already realized and non speaker-concerning (Hitogoto), are dominant in the novel. Furthermore, we attempt to analyze the co-occurrence of “bekammeri” and “beshi” or “meri”. The results show the complementary relationships between both auxiliary verbs.

Key Words : bekammeri, narration and conversation, non speaker-concerning event, complementary relationship between auxiliary verbs

* 北陸大学経済経営学部 (学外講師) Faculty of Economics and Management, Hokuriku University (Faculty Extramural)

はじめに

古典日本語において、助動詞「べし」と「めり」によって構成される「べかめり」は平安時代、とりわけ一条朝を中心とする時期の和文資料に集中して現れる、特異な複合辞である。この辞に関するこれまでの辞書類の記述をみるに、分かったようなわからぬような釈義であり、その語義や文中での機能が明らかにされているとは言い難い。たしかに「べかめり」の現存作品における使用頻度は決して高いものとはいえず、積極的な考察が行われてこなかった理由の一因もそこにあるといえよう。しかし私見によれば本助動詞は、それが使用された作品におけるテキスト構成のありようを明らかにするにあたって重要な手がかりを提供してくれるものである。

そこで本稿では、比較的多くの用例がみられる源氏物語を調査対象とし、その意味用法の分析を通して、本助動詞が作品におけるテキスト構成にどのように関わっているのかを明らかにする。なお今回は特に会話文を考察の対象とし、とりわけ「べし」「めり」との構文機能面での相違を考察することを通して問題の本質に迫りたいと思う。

問題の所在

あしたにおきさせ給ふとても、あくるもしらで、とおぼしいづるにも、なほあさまつりごとはおこたらせ給ひぬべかめり。 桐壺 17

これは源氏物語桐壺巻において、寵愛していた桐壺更衣死去後の、桐壺帝の悲嘆のさまを描写した箇所であるが、ここに現れている「べかめり」という助動詞について従来どのような意味記述がなされてきたか。本稿での具体的考察に先立ち問題の所在を明確にするために、まずは各辞書類の記述をみてみる。

- ・『源氏物語辞典』（北山谿太）『『べかるめり』の略。』
- ・『古語大辞典』（小学館）「...違いないようだ。...のように思われる」
- ・『岩波古語辞典』（第二版）「べきであるようだ」
- ・『日本国語大辞典』（第二版）「...しそうな様子に見える...に違いないようだ。」
- ・『日本語文法大辞典』（秋本守英執筆）『『べし』の意味を想像的・婉曲的に表したり（①）、『めり』の意味を今実現しているのではなく、きっと実現するであろうと推量的に表したり（②）する。（①②は説明の便宜上、筆者が仮に付した）」

これらを通観するに、ほとんどが現代語による置き換え訳を挙げるに過ぎず、用法や構文機能に関する記述はほとんどみられない（ちなみに、古典文法に関するさまざまな事象を網羅している小田勝『実例詳解古典文法総覧』では、そもそも「べかめり」の項自体が見当たらない。このように助動詞の中でも複合辞となると、その記述や考察が閑却されているのが現状である）。中でわずかに『日本語文法大辞典』のみがその点に関してやや踏み込んだ記述をしているが、そもそも②の項は「めり」との比較で「べかめり」が非実現事態の述べ立てに用いられることを述べている一方で、①は既実現・非実現、いずれの事態の述べ立てについてなのか不明瞭である。したがって①②両項の関係は相互に排他的なものか、あるいは双方を兼

ねる事例があるのか、その点が甚だ曖昧なものとなっている。そもそも次稿で述べるように源氏物語地の文の「べかめり」は既実現事態の述べ立てが多くを占め、その点で②のような説明は甚だ不安を感じさせる。

他方、源氏物語の「べかめり」を中心に扱った研究として、三宅（2022）が挙げられる。証拠性という観点から物語中の用例を豊富に挙げつつ検証しており、注目すべきものであるが、私見によれば、用例の扱いに関しては次の3点で大きな問題が存在するようである。

1)地の文と会話文の用例を区別せず分析している。

2)当該論文では「めり」との比較を通して「べかめり」の意味用法を明らかにしているが、「べし」との比較検討もなされるべきではないか？

3)「べかめり」一語としての語義の考究に重きがおかれ、テキスト構成機能という点が考慮されていない。

まず1)に関しては、「べかめり」のような（いわゆる）推量辞は特に、事態をどの視点から捉えて述べるか、すなわち表現主体の視点のありようが考察にあたっ
ての重要なポイントとなる。この点、源氏物語では特に地の文における、全知の立場ともいわれ、かつ自在に登場人物の視点に憑依し得る語り手の複眼的視点と、会話での登場人物の単眼的な視点のありようとは根本的に異なるものであり、これらはやはり分けて考察すべきであろう。本稿では地の文と会話文（すなわち地と詞）の別をとりわけ重視し、それぞれの環境の中での当該助動詞のふるまいを逐一記述するが、それはこの点に理由がある。

また2)については、三宅（2022）は証拠性の変質をみるために両助動詞を比較しているが、「べかめり」は元々「べし」に「めり」が下接したものである、という語構成に立ち返って考えるならば、まずは「Xべし」と、それに「めり」が下接した「Xべかめり」とを比較対照すべきではないだろうか。事実、三宅（2022）も、「めり」との違いを比較した結果、結局は「べし」の意味用法を論じるところに行きついている。「べし」に「めり」が付くことでその意味や機能がどう変容するかをみるべきであろう。（これは例えば、「咲きけり」「咲きにけり」の違いを論ずるには必然的に「に」の意味機能を問題にせざるを得ないのと同じの問題である）。

さらに3)についていえば、三宅（2022）では証拠性のありようが考察の主なテーマとなっているためやむを得ない面もあるが、とりわけ地の文の「べかめり」の意味機能を考察する際、テキストの中でそれがどのように機能しているか（すなわち、テキストの構成にそれがどのように寄与しているか）という点が閑却されているように思われる。そこで今回は特にこの点に留意して考察を進めたい。その際の一つの手がかりとして、本稿では近接して現れている他の助動詞との機能連関を重視し、そこから、「べかめり」そのものの語義に立ち返って考察する、という手続きを踏む。今回はこの点を確認するために、作品中に多くみられる「べし」との共起例を積極的に取り上げて検討を行う。

またこれに関連して、考察にあたっては当該助動詞の文の中での現れようにも注意する。具体的には、文末に現れているか、それとも条件節や名詞修飾節などの文中に置かれているか、である。とりわけ後者の場合では、文末に現れた他の助動詞との機能的連関を常に考慮に入れなければならないからである¹。

以上の検討で明らかになった問題点について以下、順次考察を加えてゆく。まずは本作品における「べかめり」の地の文・会話文にみられる傾向の違いを明らかにするところからはじめたい。

二、源氏物語における「べかめり」の様相―地と詞の間にみられる傾向の違いを中心に―

ここでは前節で指摘した三宅（2022）の論にみられる問題点を踏まえつつ、源氏物語中の「べかめり」の用例を地の文と会話文（以下本稿では伝統的な用語にしたがってそれぞれを地、詞と称する）のそれぞれに分けた上で、相互の傾向の違いを指摘してみたいと思う。

まず「べかめり」の上接動詞を、思惟、知覚、発言、移動、変化、存在、その他、以上 7 つのカテゴリーに分け、それぞれの用例を地・詞に二分した上で、地の比率の高いカテゴリーから順に上から並べてみると次の表を得る。なお思惟動詞と存在詞において特に用例数の多い語はそれぞれの数値をイタリック数字で掲出した。

また、物語の登場人物の心内表現である、いわゆる「心」の部分は、自身の言動に敬語が用いられているなど明らかに語り手の視点からの叙述である場合は地としたが²、直接話法的なものは詞の例に含めた。

	地	詞	計
思惟	36	21	57
おぼす	<i>11</i>	<i>3</i>	<i>14</i>
おもふ	<i>10</i>	<i>7</i>	<i>17</i>
おぼゆ	<i>3</i>	<i>3</i>	<i>6</i>
発言	5	3	8
知覚	3	3	6
その他用言	20	24	44
存在	6	23	29
あり	<i>1</i>	<i>11</i>	<i>12</i>
おはす	<i>3</i>	<i>5</i>	<i>8</i>
はべり	<i>0</i>	<i>6</i>	<i>6</i>
変化	0	3	3
移動	0	3	3
計	70	80	150

表 1) 上接用言別にみた源氏物語「べかめり」の用例数

まず源氏物語全体で「べかめり」は 150 例確認でき、うち地の例は 70、詞の例は 80 である。表をみると、「思ふ」などの思惟動詞の上接例が占める割合は、地では全体の 51%、対して詞では 26%と、地での比率の方が圧倒的に高く、他方「あり」「あらはる」などの存在・出現や「なる」などの変化、さらに「来」など移動を表す動詞では用例が詞に偏る傾向が顕著である。このような傾向は次稿で述べるように、地における語りの機能と密接に関わる現象であるものとみられ、なかでも思惟動詞のうち「おぼす」が「おもふ」「おぼゆ」に比して特に地に偏る理由も、この点から説明できるものと思われる。

三宅（2022）は、「他者の心中を推定」する点を「べかめり」の特徴的な意味としているが、以上の結果を踏まえるならば、地に関しては確かにそのような傾向が指摘できるが、一方で詞に関しては果たしてそう言えるかどうか。そこでは上述の通り思惟動詞の上接例は 21 例、これに対して存在詞も 23 例確認され、思惟動詞上接例の比率に特段の優位性は認められないのである。

次に、源氏物語における「べかめり」の使用実態をより分析的かつ動態的に検討するために、巻ごとに地・詞それぞれの用例数を示す。巻が進むにしたがって出現頻度に変動がみられるかどうかを確認するためである。

第一部前半		第一部後半		第二部		第三部	
桐壺	1/0	少女	2/4	若菜上	0/5	匂宮	2/0
帚木	4/0	玉鬘	0/1	若菜下	1/3	紅梅	0/2
空蟬	1/0	初音	1/1	柏木	—	竹河	4/1
夕顔	4/2	胡蝶	2/1	横笛	0/3	橋姫	2/7
若紫	3/0	蛭	2/2	鈴虫	—	椎本	2/5
末摘花	0/1	常夏	0/3	夕霧	0/1	総角	4/10
紅葉賀	—	篝火	—	御法	3/0	早蕨	—
花宴	1/0	野分	1/0	幻	—	宿木	5/1
葵	1/1	行幸	1/1			東屋	1/2
賢木	7/0	藤袴	0/3			浮舟	0/6
花散里	1/0	真木柱	1/4			蜻蛉	1/3
須磨	2/0	梅枝	2/0			手習	1/2
明石	4/1	藤裏葉	—			夢浮橋	—
濡標	1/0						
蓬生	—						
関屋	—						
絵合	2/1						
松風	1/0						
薄雲	1/0						
朝顔	0/1						
計	34/7		12/20		4/12		22/39

表 2) 源氏物語各巻における「べかめり」用例数

表において「/」の左側の数字が地、右側が詞における用例数を示す。なお「―」とあるのは「べかめり」の使用が見られない巻である。

これをみると、第一部の前半、朝顔の巻あたりまでは地の用例が優勢だが、第一部の後半になると詞の比率が増し、さらに第二部以降になると詞の例が多数を占める巻が多くみられるようになる。これをもう少し仔細にみると、第一部の前半では詞での使用例が巻あたり多くて 2 例、さらには全く用いられていない巻も多いのに対し（ちなみに夕顔の 2 例もある人物の一回の発話の中に近接して現れたものである）、第一部後半以降では地に比して、詞における「べかめり」の多用が目立つようになる（ことに橋姫から総角と浮舟においてそれが顕著である）。このことは一方で、地では「べかめり」に関しては第一部前半に比べ積極的かつ機能的な用いられ方がなされていない、ということを示すものではないだろうか。

また、本作品における「べかめり」の使用頻度は、各巻の叙述の特徴を反映しているとみられるふしがある。一例を挙げると、詞での使用比率が高い傾向にある第一部後半以降にあって、御法、竹河、宿木ではそれと対照的に、地に使用例が偏る傾向を見せている。

もちろん、このような傾向の違いが生じる要因として、その巻の地・詞における、「べかめり」で述べ立てるべき事態の多寡、という点を考慮すべきだが（「べかめり」で叙述すべき事態が存在しなければ当然用いようがない）、それにしてもこのように第一から第三の各部によって、あるいは近接する巻の間に大きく傾向を異にするということは、やはりそこに何らかの筆法の変化や相違を見て取るべきかと思われる。

また、第一部前半では登場人物の会話に「べかめり」が使用されること僅少であるのに対し、第三部になると多用（特に後述するように一区切りの会話の中での連用が目立つ）される。そのことの意味も考える必要があるように思われる。

さて表 2 の数値から、巻によって「べかめり」の用例数にかなりの差があることがわかるが、本作品は巻によって長さ、すなわち総語数に大きな違いがあるため、これらの数を単純に比較することはできない。やはり、ある単位にならして相互を比べる必要が出てくる。

表 3 は岩波の新体系本において、それぞれの巻で「べかめり」が 1 頁あたりどの程度の頻度で現れているかを示したものである。右列が 1 頁あたり頻度で、各巻の用例数を新体系本でのその巻の頁数で除したものである。したがって数値は、例えば 1 頁ごとに 1 例現れていれば 1.0、10 頁に 1 例の頻度であれば 0.1 となる。なお、今回は新体系本で 35 頁以上を割いている巻のみを掲出した。

巻名	用例数	新体系本 頁数	1 頁あたり 頻度
簪木	4	45	0,089
夕顔	6	46	0,130
若紫	3	47	0,064
葵	2	46	0,043
賢木	7	49	0,143
須磨	2	42	0,048
明石	4	39	0,103
少女	6	49	0,122
玉蔓	1	39	0,026
真木柱	5	37	0,135
若菜上	5	97	0,052
若菜下	4	98	0,041
柏木	0	39	0,000
夕霧	1	68	0,015
竹河	5	40	0,125
橋姫	9	37	0,243
椎本	7	36	0,194
総角	14	86	0,163
宿木	6	88	0,068
蜻蛉	4	54	0,074
手習	3	63	0,048

表 3) 源氏物語各巻における「べかめり」出現頻度

今 1 頁あたりの頻度に注目すると、全体的な傾向として、0.05 前後あるいはそれ以下の巻と、1.5 前後あるいはそれ以上の巻とに大きく二極化していることがみてとれる。頻度の最も大きい橋姫と、用例数 0 の柏木について頻度の低い夕霧とでは、数値にして 16 倍もの開きがある。また第二部、特に柏木から夕霧にかけては「べかめり」の使用が少なく、今この巻々を通しての頻度を計算すると 0.028 の値を得る。その一方で後続の第三部、とりわけ橋姫から総角に至る三巻は高い頻度の値を示している（さらにこれらの巻においてはいずれも詞における例が多くを占めることは特徴的である）。このような点についても、源氏物語という一作品における「べかめり」のふるまいを考察するにあたっては注目する必要があるだろう³⁾。

最後にここで、次節以降の考察の基礎とするために、地・詞を通じて源氏物語での「べかめり」の用法につき、その全般的特徴を指摘しておく。

- 1, 主に人事についての叙述に用いられ、自然描写に用いられることは極めて稀である
- 2, 人事の中でも他者の挙動を述べ立てる場合が多くを占め、表現主体の「わがこと」叙述には用いられにくい
- 3, 否定形は用いられにくい

1, については自然現象、ならびに人の意志が関わらない事態に関する描写とみられるものは次の2例のみで、その他148例はいずれも、人の意志が関わる事態、とりわけ、人の挙措を描写、あるいは他者の心中を推し量る場合である。

あなたに通ふべかめるすいがいの戸を、すこしおしあけて見給へば、月をかしきほどに霧わたれるをながめて、簾をみじかく巻き上げて、人々ゐたり。 橘姫 314

こもとに几帳をそへたてたる、あなくちをし、と思ひて、ひきかへる折しも、風のすだれをいたうふきあぐべかめれば、あらはにもこそあれ、その御几帳おしいでてこそ、といふ人あなり。 椎本 374

ここで注目すべきは、べかめりでは「はや舟にのれ。日もくれぬべし」(伊勢物語・九段)「見はてんと思ふに、雨ふりぬべし」(源氏・手習 328)「かくてまたあけぬれば、天禄三年ともいふめり」(蜻蛉日記)のような、「べし」「めり」において普通にみられるような自然現象を述べ立てる例が極めて少ない点である。自然よりも人事の描写を主とす。これが「べし」「めり」と大きく違う点である。

2, に関しては、つとに富士谷成章が稿本『あゆひ抄』において、「めりは他にまかせて言ふゆゑに遠く、我が上にはいはず。」と述べる通り、ひとごとの述べ立てを主としてわがこと叙述にあずかること稀な「めり」の語性にもとづくところが大きいように思われる。「べし」は表現主体の意志を述べる例も散見されるからである。ただ例外と思われる例は、

あはれに心すごきものゝ、かたはしをかきならしてやみたまひぬれば、「うらめしまでおぼゆれど、すきずきしさを、さまざまにひきいでても御覧ぜられぬかな、秋の夜ふかし侍らんもむかしのとがめやとはばかりてなむまかで侍りぬべかめる。 横笛 56

である。ここで「まかで侍り」とあるのは話し手である夕霧の挙動で、自身の行為の可否を問題としている。

さらに3, に関しては「めり」に否定形が存在しない以上、それを語末要素にもつ「べかめり」に否定形が存在しないのは当然のことだが、否定表現が上接する場合も皆無である。また、「べかめり」の否定形に相当する助動詞に「まじかめり」があるが、源氏物語全体でわずか9例であり、このことは「べかめり」自体がそもそも、ある事態に対する否定の述べ立てとは本質的に馴染まないことの証左ではないだろうか。

次節以降では源氏物語の「べかめり」のうち、まず詞における用例について考察する。

三、源氏物語の詞における「べかめり」の機能(1)

ここでは源氏物語の詞に現れた「べかめり」について、その意味用法ならびに会話の中での伝達機能に注目して検討する。そのための手がかりとしてまず、「べかめり」による表現がそもそものような表現機構に基づいて成り立つのかをみるために、当該助動詞による表現を成り立たせる構成要素を確認するところから始めたい。

まずは、

・「べかめり」によって述べ立てられる事態がどのようなものであるか
すなわち、事態そのものの特性が重要である。それに加え、本節での考察対象は詞、
すなわち会話であるから、

・話し手にとってそれがどういう事態か、特に事態と話し手との距離
さらにそれを

・聞き手に対してどういう態度で表明するか
が重要になる。これをもう少し詳細に定式化すると、

α) どのような事態を（対象）

β) 表現主体にとってどのような事態として（認定様式）

γ) どのようなとらえ方で

δ) どのような述べ方で（以上、事態把握あるいは表明の方法）

叙述するか、以上 4 点に着目する必要があるだろう。α) は話者の違いに関わらず客観的かつ不変な値であるのに対し、β) ないし δ) は話し手によって変動する値で、以降の考察で明らかになるように「べかめり」の使用不使用にも大きく影響する値といえる。

今この 4 点につき源氏物語の「べかめり」の詞の用例を精査してみると、それぞれにおいて次に挙げる対立項が析出されるが、これらは「べかめり」の意味用法を決定づけるにあたっての基本要素と考えられる。

α) ①既実現事態の述べ立て ～ ②未実現事態の述べ立て

β) ①一般事象～ ②個別事象（②-1 ひとごと ～ ②-2 わがこと）

γ) ①事態描写 ～ ②設想 ～ ③当為（＝主張提示）

δ) ①事態との距離確保 ～ ②独善的な断定の回避

この中で β ①は

「なにごとにも心やすきほどの人こそみだりがはしうともかくもはべべかめれ、
こなたをもそなたをもさまざま人のきこえなやまさむ、ただならむよりはあ
ぢきなきを、なだらかにやうやう人めをもならすなむよきことにははべるべ
きと申し給へば、 行幸 80（源氏→内大臣）

のように、一般論として人や物事のありようを総括的に述べるもので、源氏の「べかめり」には多くみられる。これと対立項をなす②の個別事象のうち、

「すい給へるやうに人はきこえなすべかめれど、心のそこあやしくふかうお
はする宮なり。 椎本 368（薫→大君）

のような「ひとごと」事態を叙述するものも「べかめり」にはとりわけ多くみられるが、そこでは推量というよりも、上の例が示すように事態のありようを（かなり

高い確信度をもって）描写する（γ ①）例が多く割合を占める⁴。これに対する γ ②の設想とは山田孝雄（1936）の用語であるが、現実事態の描写ではなく、想像など脳裏で観念的に操作された事態を叙述するもので（ちなみに山田は設想作用という用語を、直接表象・回想作用の対立概念として用いている）、「べかめり」においても

「やがて、さも御心づかひせさせ給ひつべからむ夜、ここにも人知れず思ひか
まへてなむ、聞こえさすべかめる。 浮舟 252（侍従→大夫）

のような例を見出すことができる（「べからむ」との互用が設想事態であることを裏付ける）。そこからさらに、この設想された内容に対して、事の是非・当否など話し手の価値判断が加わると γ ③の当為となるものとみることができる。

以上述べた γ) は主に「べし」の表現機構が反映されたものであるが、これに対して δ) は「めり」の表現機構を色濃く反映するものである。 δ) ①は直接見聞していない（あるいは他者の心中のように、直接見聞できない）事態に対して、不案内なひとごととして距離をとって述べ立てることを表明し、したがって γ) ①の事態描写に顕著に表れる。他方 δ) ②は自身の判断主張について、聞き手への配慮から断定的に述べることを忌避する作用であり、したがって γ) ②③の設想・当為と密接な関連をもつ。これを別の角度からみると、 δ) ①は述べ立て事態をヨソの事態として異化するはたらきであり、これに対して②はわがこと（あるいはわが判断）について極端な断定に陥るのを避けるという点で、述べ立て事態においては自⇄他の関係にあるが、言明責任の回避という点で両者は共通している⁵。

このように、 α) β) は「べかめり」が述べ立てる事態がどのようなものであるかによって一義的に決まるものであるのに対し、 γ) δ) はいわば α) β) に対する従属変数であるから、必然的に α) β) の値に依存して決まる。例えば α) が②であれば γ) は必然的に②または③ということになる。

そうして、実際の「べかめり」の用法は、 α) ないし δ) 4 種類の各項の掛け合わせにより発現したものと考えることができる。その組み合わせは、理論上は $2 \cdot 3 \cdot 3 \cdot 2$ の都合 36 通り存在するわけだが、実際に源氏物語の用例において確認できるのは以下に挙げる I ないし V の類型である。

以下、「べかめり」における各類型の例を挙げる⁶。なお巻名直後の括弧は（話し手→相手、述べ立て事態）を表す⁷。

I) 既実現の一般論的事態や事例（世の常のこと）を挙げ、事態との距離を確保しつつ描写（13 例）

①うへ、「心あさげなる人まねどもは、みるにもかたはらいたくこそ。うつほのふじはら君のむすめこそ、いとおもりかにはかばかしき人にて、あやまちなかめれど、すくよかにいひいでたる事もしわざも、女しき所なかめるぞひとやうなめる、とのたまへば、「うつゝの人もさぞあるべかめる。人々しくたてたるおもむきことにて、よきほどにかまへぬや。」 蛍 441（源氏→紫上）

②おとど、ひめ君をすこしといで給へとて、しのびて、「少将、侍従などゐてまうできたり。いとかけりまほしげに思へるを、中将のいとじほふの人にてゐてこぬ、無心なめりかし。この人々は、みな思ふ心なきならじ、なほなほしききはをだに、窓のうちなるほどは、ほどにしたがひてゆかしく思ふべかめるわざなれば、このいへのおぼえ、うちうちのくたかしきほどよりは、いと世にすぎで、ことごとしくなむいひ思ひなすべかめる。方々ものすめれど、さすがに人のすきごといいよらむにつきなしかし。」 常夏 7（源氏→玉鬘、二例目は II の世評にあたる）

③「なほしばしは御心づかひしたまうて、世にそしりなきさまにもてなさせ給へ。なにごととも心やすきほどの人こそみだりがはしうともかくもはべかめれ、こなたをもそなたをもさまさま人のきこえなやまさむ、ただならむよりは

あぢきなきを、なだらかにやうやう人めをもならすなむよきことにははべるべき」と申し給へば、行幸 80（源氏→内大臣）

④「かぎりなき人ときこゆれど、いまの世のやうとては、みなほがらかにあるべかしくて、世の中を御心とすぎし給ひつべきもおはしますべかめるを、姫宮は、あさましくおぼつかなく心もとなくのみみえさせ給ふに、さぶらふ人々は、つかうかつるかぎりこそ侍らめ。」 若菜上 217（乳母→弁）

以上Ⅰの類型では、②から④の例に典型的なように、自身がおかれた、あるいは自身に関わる個別事態を、「べかめり」が述べ立てる世の一般的ありかたと対比させる、という表現形式をとるものが多く、この点は当該助動詞のテキスト構成機能の面からも注目される。

Ⅱ）既実現かつ真偽の確認がとれない、あるいは取りようのない身近な「ひとごと」事態（他者の心中や世評など）を、距離を確保しつつ推定（33 例）

⑤「その人とはさらにえ思ひえ侍らず。人にいみじくかくれしのぶるけしきになむみえ侍るを、つれづれなるままに南のはじとみあるなかやにわたりきつつ、車のおとすればわかきものどものぞきなどすべかめるに、このしうとおぼしきもはひわたる時ははべかめる。」 夕顔 111（惟光→源氏、五条の家について）

⑥「いとさばかりにはみたてまつらぬ御心ばへを、いどこよなくもにくみたまふべかめるかな」となげきたまひて 胡蝶 418（源氏→玉鬘、汝が我を嫌う、とする）

⑦「さかし。いとさまさま御覧ずべかめるはしをだに、見せさせ給はぬ。……うちかくろへつつ多かめるかな。……」などきこえ給ふ。 橋姫 325（薫→匂宮、汝が我に消息を見せぬ、とする）

⑧「すい給へるやうに人はきこえなすべかめれど、心のそこあやしくふかうおはする宮なり。」 椎本 368（薫→大君、匂宮について）

⑨「なほこれかれ、うたてひがひがしきものに、いひ思ふべかめるにつけて、思ひみだれ侍るぞや、と、いひさし給ひつ。 総角 400（大君→中君、侍女たちの言動について）

Ⅱは話し手にとってのひとごと事態を述べ立てるものであるが、ひとごとの中でも話し手の交流圏内にある人について述べたものがほとんどで、話し手にとっての交流圏外、すなわち面識のない、縁もゆかりもない人物について述べ立てた例は極めて稀である。またこの類型では⑥や⑨のように、対象人物の心中を推定する例が多いことも注目される。

Ⅲ）事態に対する話者の見解・主張を理の当然として述べつつ、一方で断定的な言い回しを回避（6 例）

⑩「むかしのけさうのをかしきいどみには、あだ人といふいつもじをやすめ所にうちおきて、ことのはのつづき、たよりある心ちすべかめり」などわらひ給ふ。 玉鬘 370（源氏→玉鬘、和歌評）

⑪「たいだいしきこと、いかでかさはあらむ、こなたはさまかはりておぼしたて給へるむつびのけぢめばかりにこそあべかめれ、宮をばかたがたにつけていとやむごとく思ひきこえ給へるものを、とかたり給へば、…」 若菜上 300（夕霧→柏木、「こなた」は紫上を指し、源氏の処遇について女三宮と対比させつつ述べる）

⑫「箏の御ことは、ゆるふとなけれど、なほかくものにあはするをりのしらべにつけて、ことちのたちどのみだるるものなり、よくその心しらひとゝのふべきを、女はえはりしづめじ。なほ大将をこそめしよせつべかめれ。この笛ふきども、まだいとをさなげにて、拍子ととのへむたのみつよからず、」とわらひ給ひて、 若菜下 335（源氏→女樂に居合わせた人々）

⑬「想夫恋は心とさしすぎて言いで給はんやにくきことに侍らまし、もののついでにほのかなりしはをりからのよしづきてをかしうなむ侍りし。なにごとにも人によりことにしたがふわざにこそ侍るべかめれ。よはひなどもやうやういたうわかひ給ふべきほどにもものし給はず、またあざれがましようすきずきしきけしきなどにもものなれなごもし侍らぬに、うちとけ給ふにや、大方なつかしうめやすき人の御ありさまになむものし給ひける」 横笛 64（夕霧→源氏、落葉宮を評する中で用例）

⑭「さかし。いとさまざま御覧ずべかめるはしをだに、見せさせ給はぬ。……うちかくろへつつ多かめるかな。さる方に見どころありぬべき女の、もの思はしき、うち忍びたる住みかども、山里めいたるくまなどに、おのづから侍るべかめり。」 橋姫 326（薫→匂宮）

⑩⑪⑬に見られるように和歌や人物などを評する中で、話し手の見解や主張を述べる際に「べかめり」を用いる例が一定数確認される。⑫では、箏の弦を「女はえはりしづめじ」とするところから、大将（＝夕霧）を召し寄せるべきだったようだと、理の当然としての判断が「べかめり」によって示される。このように「べかめり」の構成語基である「べし」のはたらきにより自身の見方を理のしかるべきところとして述べつつも、独断に陥るのを避けるために一方の語基である「めり」がいわゆる「婉曲」的な述べ立てとして機能しているのである。

IV) 主にひとごとの未実現事態の様相を、実現可能性が高いものとして推定 (14 例)

⑮御みみとどめたまへば、わが御うへをぞいふ。「かしこがり給へど人のおおよ、おのづからをれたることこそいでくべかめれ、子をしるといふはそらごとなめり」などぞつきしろふ。 少女 294（女房同士の会話）

⑯「さてかかるふる事のなかに、まろがやうにじほふなるしれものゝ物語はありや。いみじくけどほき、もののひめ君も、御心のやうにつれなく、そらおぼめきしたるは世にあらじな。いざ、たぐひなきものがたりにして、世につたへさせん、と、さしよりてきこえ給へば、かほをひきいれて、「さらずともかくめづらかなる事はよがたりにこそはなり侍りぬべかめれ」とのたまへば、 螢 440（源氏→玉鬘）

- ⑰「こはいかにもてなし給ふぞ、と、夢のやうにあさましきに、のちの世のためしにいひいづる人もあらば、昔ものがたりなどに、ことさらにをこめきてつくりいでたるものたひにこそはなりぬべかめれ。」 総角 414(大君→薫)
- ⑱「われも世にながらへば、かうやうなることみつべきにこそはあめれ。中納言の、とざまかうざまにいひありき給ふも、人の心をみむとなりけり。心ひとつにもてはなれて思ふとも、こしらへやるかぎりこそあれ、ある人のこりずまに、かかるすぢのことをのみ、いかで、と思ひためれば、心よりほかに、つひにもてなされぬべかめり。これこそは、かへすがへす、さる心して世をすぐせ、とのたまひおきしは、かかることもやあらむのいさめなりけり。」 総角 439(大君の心内)
- ⑲「をかしの人の御にほひや。をりつれば、とかやいふやうに、鶯もたづね来ぬべかめり」などわづらはしがるわかき人もあり。 宿木 105(侍女同士の会話)
- ⑳「いな、まだしかるべし」と、しのびてささめきかはすを、うへ、「いとききにくき人の御本性にこそあめれ、すこし心あらむ人は、わがあたりをさへうとみぬべかめり」とおぼす。 東屋 158(中君の心内)

IVの類型は⑰における未然形接続の「ば」、また⑳での「む」との呼応が示す通り、いずれも「べかめり」が未実現事態を述べ立てているケースであるが、これらは⑩以降の例のように、助動詞「ぬ」に下接するものが大半を占めており、この点特徴的である。これは「ぬ」が、ある状態の自然推移的な発生を意味するところから、「べかめり」述べ立て事態の実現を「ひとりでにそうなる」ものとして、すなわち高い確信度をもって述べる態度と関係するであろう(⑮に「おのづから」が現れていることも、これと同様に捉えることができる)。このように事態の実現を高い確信度をもって述べつつも、一方では「めり」の働きにより、それが単なる強弁、あるいは独断的な見方とみなされることを回避するのである。またこの類型では、これから起こり得る事態についての世の風聞を危惧する例(⑮～⑰)が散見される点も注意される。

V) 話し手自身の言動や境遇についての判断を、独善的な断定を回避しつつ述べる(4例)

- ㉑あはれに心すごきものゝ、かたはしをかきならしてやみたまひぬれば、「うらめしきまでおぼゆれど、すきずきしさを、さまざまにひきいでても御覧ぜられぬるかな、秋の夜ふかし侍らんもむかしのとがめやとはばかりてなむまかで侍りぬべかめる。」 横笛 56(夕霧→御息所)
- ㉒「おのづからこそ、静かなる思ひかなひゆけど、残り少なきこちするに、はかばかしくもあらで過ぎぬべかめるを、きし方ゆくすゑ、さらにえたる所なく思ひしらるるを、」 橋姫 309(八宮→阿闍梨)
- ㉓「なかなかなるほどに、承りさしつること多かる残りは、今少しおもなれてこそは、恨み聞こえさすべかめれ。」 橋姫 321(薫→大君)
- ㉔「すむらむ山里はいづこにかあらむ。いかにして、さまあしからずたづねよらむ。僧都にあひてこそは、たしかなるありさまもききあはせなどして、とも

かくもとふべかめり」など、ただこのことをおきふしおぼす。 手習 386 (薫の心内)

このように「べかめり」が話し手自身の言動、すなわち「わがこと」を述べ立てる例は全体の中では僅少である。このことは構成語基である「めり」の、主にひとごとを述べ立てて「我が上にはいはず。」(富士谷成章・稿本『あゆひ抄』「めり」の項)という傾向と関係するであろう。また、㉓㉔のように、自身の行為について「～すべきであった」と当為の判断として述べる例も散見され、これもVの類型の一つの特徴となっている。

以上の例を通観すると、詞における「べかめり」は上掲のⅠⅡに典型的に表れているように、一般化された事態または話し手の交流圏にある他者の挙動を叙述する際に用いられた例が多く、対してVのようなわがこと事態について述べるものは4例と、僅少であることがわかる。

また、既実現(Ⅱ)、あるいはⅠのような、現実に行き起きているであろうとみなされる事態を述べ立てる例が多くを占め、純粹に未実現事態と認定されるもの(Ⅳ)は全体の半数以下である。ただ、既実現とはいえ推測の余地のない確定的な事象ではなく、他者の心中など、さだかには覚知しがたい事柄を叙述する場合が大半を占める点は注意を要する(ついでにいえば、心内の例はⅣⅤに偏る)。

「べかめり」は言うまでもなく「べし」と「めり」による複合辞であるが、その複合のあり方を反映して、「べし」の語義の反映として事態や自身の見解に対する強い確信を表明しつつも、それによって言質を取られないように、あるいは独善的判断と思われぬよう「めり」のはたらきによって婉曲に回避するという、作用反作用の関係でバランスを取ろうとする話し手の姿勢がそこには見て取れるのである。

四、源氏物語の詞における「べかめり」の機能(2)

前節では源氏物語の詞に現れた「べかめり」につき、各用例の意味用法を個別に検討したのであるが、本節では用例の中で近接して現れている他の助動詞との意味的・機能的連関に着目しつつ考察を試みる。その際に手がかりとするのは、互用例である。ここでいう互用とは、ある場面、あるいは或る事物・人物・事態の叙述にあたって意味用法の近似した助動詞が近接して用いられているケースを指す。このような互用例における「べかめり」と一方の互用助動詞相互の違いを検討することで、話し手が互いの助動詞の使用によって事態をどのように言い分けているかが把握でき、それにより前者の意味用法がより精密に認識できるであろう。ここでは特に、「べかめり」に対応する互用助動詞として、その構成語基である「めり」と「べし」を取り上げる。まず「べかめり～めり」の互用例からみていく。

1) 詞における「べかめり～めり」の互用

①「なにのうきたることにか侍らん。さぶらふめる人々もかつはみなもどきわらふべかめるものを、いとくちをしくやすからず思うたまへらるるや」とて、立ち給ひぬ。 少女 298 (内大臣→大宮)

「めり」が承ける「(人々)さぶらふ」という事態は話し手にとって疑いようのない事実であり、これに対してその人々が「もどきわらふ」という、「べかめる」が承ける事態は推定の余地がある事柄である。後者は理の当然に従った結果としての推定内容を述べ立てている。

②「なにかは、いはけなき御ほどを、宮の御もてなしよしさしすぐしてもへだてきこえさせん、とうちとけてすぐしきこえつるを、おととしばかりよりはけざやかなる御もてなしになりにて侍めるに、わかき人々とてもうちまぎればみいかにぞや世づきたる人もおはすべかめるを、夢にみだれたる所おはしまさざめれば、さらに思ひよらざりけること」と、おのがどちなげく。 少女 298 (乳母ら→内大臣)

ここでの「べかめり」は前節で挙げたⅠの類型に相当し、一般論的に設想された事態であり、その点で前後二例の個別事態(夕霧と雲居雁の一件)を述べ立てる「めり」との言い分けがなされている。ちなみに「わかき人々とて」以下の発言に関しては新体系が「世の若者一般と夕霧を対比的に語る」と注するが、この「一般⇄個別」の対比が「べかめり」と「めり」によって構成されていることは注意を要する。

③「なべてのつかうまつり人こそとあるもかかるもおのづからたちまじらひて人のみみをもめをまかならずしもとどめぬものなれば心やすかべかめれ、それだにその人のむすめかの人のことしらるきはになればおやはらからのおもてぶせなるたぐひおほかめり、まして、とのたまひさしつる御けしきのはづかしきもしらず、」 常夏 19 (内大臣→近江)

上の例では「一般論としていえば、おのずとそうなるべき」と、話者の判断を強く押し出しつつ「べかめり」が用いられている。このことは先行する「ものなれば」によってその根拠が示されていることからわかる。対する後続の「めり」は状況の描写となっており、両者の違いが見て取れる。

④「すい給へるやうに人はきこえなすべかめれ(1)ど、心のそこあやしくふかうおはする宮なり。なほざりごとなどのたまふあたりの、心かろうてなびきやすなるなどを、めづらしからぬものに思ひおとし給ふにや、となむきくことも侍る。何事にもあるにしたがひて、心をたつるかたもなく、おどけたる人こそ、ただ世のもてなしにしたがひて、とあるもかかるもなめのみにみなし、すこし心たがふふしあるにも、いかがはせむ、さるべきぞ、なども思ひなすべかめれ(2)ば、なかなか心ながきためしになるやうもあり。くづれそめては、たつたの川のごる名をもけがし、いふかひなくなごりなきやうなることなども、みなうちまじるめれ。心のふかうしみ給ふべかめる(3)御心ざまにかなひ、ことにそむくことおほくなどものし給はざらむをば、さらにかろがろしく、はじめをはりたがふやうなることなど、みせ給ふまじきけしきになむ。」 椎本 368 (薫→大君、匂宮について)

ここでの「めり」は具体的、既実現かつ目撃による判断が可能な事態を述べ立てている。これに対し「べかめり」は、(1)は世評を、(2)(3)は匂宮の心内推測に用いられている。

⑤「松の葉をすきてつとむる山ぶしだに、いける身のすてがたきによりてこそ、仏の御をしへをも、道々わかれてはおこなひなすなれ、などやうの、よからぬことを聞こえしらせ、わかき御心どもみだれ給ひぬべきことおほく侍るめれど、たわむべくもものしたまはず、中の宮をなむ、いかで人めかしくもあつかひなしたてまつらむ、と思ひきこえ給ふべかめる(1)。かく山ふかくたづねきこえさせ給ふめる御心ざしの、年へて見たてまつりなれ給へるけはひも、うとからず思ひきこえさせ給ひ、いまはとさまかうざまに、こまかなる筋きこえかよひ給ふめるに、かの御かたをさやうにおもむけて聞こえ給はばとなむおぼすべかめる(2)。」 総角 387 (弁→薫)

(1)の文では「めり」～「べかめり」の対比により、「一般的事態～個的事態（大君の心中）」が対照させられ、他方(2)では他者の、覚知可能な具体的動作と直接覚知しがたい心中とが対比されているが、(1)(2)双方とも他者の心中を「べかめり」が述べ立てている点が注目される。

⑥「われも世にながらへば、かうやうなることみつべきにこそはあめれ。中納言の、とざまかうざまにいひありき給ふも、人の心をみむとなりけり。心ひとつにもてはなれて思ふとも、こしらへやるかぎりこそあれ、ある人のこりずまに、かかるすぢのことをのみ、いかで、と思ひためれば、心よりほかに、つひにもてなされぬべかめり。これこそは、かへすがへす、さる心して世をすぐせ、とのたまひおきしは、かかることもやあらむのいさめなりけり。」 総角 439 (大君心内)

「めり」が既実現事態を述べ立てるのに対し、「べかめり」は理の当然をもって未然事態に対する推測を表明している。

⑦「いな、まだしかるべし」と、しのびてささめきかはすを、うへ、「いとききにくき人の御本性にこそあめれ、すこし心あらむ人は、わがあたりをさへうとみぬべかめり」とおぼす。 東屋 158 (中君心内)

ここでの「めり」は性格についての印象を述べ、対する「べかめり」は心中推定を担っている。

以上の用例についての検討から、「めり」～「べかめり」の互用例においては、
・「めり」・・・既実現あるいは個別事態を述べ立て具体的動作や様態を描写
・「べかめり」・・・設想、あるいは一般化された事態を述べ立て、心中を推定、話し手の判断を述べる

という傾向の違いが見て取れる。

次に「べかめり～べし」の互用例を挙げる。

2) 詞における「べし」との互用例

①「さてもあさましの口つきや、これこそは手づからの御事のかぎりなめれ、侍従こそ取りなほすべかめれ、また筆のしり取る博士ぞなかべき」と言ふかひなくおぼす。 末摘花 225 (源氏の心内)

源氏が未摘花の歌について心内で批評する場面である。ここで「べき」が現在の事態の様相を推定しているのに対し、「べかめれ」は、本来あるべき状態を述べ立てている。

②「このおとどの御心ばへのむつかしく心づきなきも、いかなるついでにかは、もてはなれて、人のおしはかるべかめるすぢを、心きよくもありはつべき。」
藤袴 90（玉鬘の心内）

③「人がらもいとよく、おほやけの御うしろみとなるべかめるしたかたなるを、などかはあらむとおぼしながら、かのおとどのかくし給へることをいかがはきこえかへすべからむ、さるやうあることにこそと心え給へるすぢさへあれば、まかせきこえ給へり。 藤袴 101（源氏の心内）

ここに挙げた②③ともに、作中人物の心内であるが、「べかめり」は②では世評の推定、また③では人物に備わる資格についての、話し手の判断を述べ立てているのに対し、「べし」「べからむ」は文末に位置して反語を担うものとして機能している。

④ことなることなきことなれども、御ありさまけはひをみたてまつるほどは、をかくもやありけん。「野をなつかしみあかいつべき夜を、をしむべかめる人も、身をつみて心ぐるしうなむ。いかでかきこゆべき、」とおぼしなやむも、いとかたじけなしとみたてまつる。 真木柱 138（朱雀院→玉鬘）

「べき」は当為を、対する「べかめる」は他者の心中推定として機能している。

⑤「いにしへの世のたとへにも、さこそはうはべにはぐくみけれと、らうらうじきたどりあらんも、かしこきやうなれど、なほあやまりても、我ためしたの心ゆがみたらむ人を、さも思ひよらず、うらなからむためは、ひきかへしあはれに、いかでかかるにはと、罪えがましきにも、思ひなほることあるべし。(1)。おぼろけのむかしの世のあたならぬ人は、たがふふしぶしあれど、ひとりひとり罪なきときにはおのづからもてなすためしもあるべかめり。(1)。さしもあるまじきことに、かどかどしくくせをつけ、あいぎやうなく、人をもてはなる心あるは、いとうちとけがたく、思ひぐまなきわざになむあるべき。(2)。おほくはあらねど、人の心の、とあるさまかかるおもむきをみるに、ゆゑよしといひ、さまざまにくちをしからぬきはの心ばせあるべかめり。(2)。みなおのおのえたる方ありて、とる所なくもあらねど、又とりたてて、我うしろみにおもひ、まめめしくえらひおもはんには、ありがたきわざになむ。ただまことに心のくせなくよきことは、この対をのみなむ、これをぞおいらかなる人といふべかりける、」となむ思ひ侍る。 若菜上 288（源氏→明石女御）

本例では、「べし(1)」が述べ立てる「（継母が継子に対して）ひきかへしあはれに、・・・思ひなほることある」という逆説的な事態がなぜ起こり得るのかを、「継母を素直に信じる子ゆえ（うらなからむためは）」という推論の過程を示しつつ、理の当然として述べ立てている。また次の「べき(2)」は「AはBなり」の文型をもって自身の判断を命題の形で主張するものとなっており、いずれも自身の主張を強く示すものである。これらに対して「べかめり」は、あるいはいにしへのためしを述べ(1の例)、あるいは世のひとごと事態につき、自身の経験を抽象化した結果を述べ立てている(2の例。波線部「人の心の・・・おもむきをみるに」がそれを何より如実に示している)。ついでながらここで「べかりける」が共起している点も注意される。

⑥おとなびたる人々めしいでて、「うしろやすくつかうまつれ。何事ももとよりかやすく、世にきこえあるまじききはの人々は、すゑのおとろへもつねのことにてまぎれぬべかめり。かかるきはになりぬれば、人はなにと思はざらめど、くちをしうてさすらへむ、ちぎりかたじけなく、いとほしき事なむおほかるべき。」 椎本 352（八宮→女房）

ここでの「べかめり」は世の常の事例を一般論として提示している。これに対して「べし」が述べ立てる事態は「かかる」があることからわかるように、わがことであり、かつ目の前の事態である。

⑦右近「あが君、かかる御けしき、つひに人みたてまつりつべし、やうやう、あやしなど思ふ人侍るべかめり。かうかかづらひおもほさで、さるべきさまにきこえなし給ひてよ。」 浮舟 250（右近→浮舟）

ここでの「べし」「べかめり」は、事態の対する確信度の違いを表すものとして使い分けられている。すなわち、「つひに人みたてまつりつ（浮舟と勾宮との関係に他の人が気づく）」という事態は「早晚きつとそうなる」との強い確信から述べられたものであり、対して「やうやう、あやしなど思ふ人侍る（だんだん、妙だなど思う人も出てくる）」という事態は「そこからさらにこういうことも・・・」と、「べし」が述べ立てる事態よりも実現の確度の低いものとして述べられていると捉えるのが自然であろう。

⑧この御文もたてまつるを、宮、だいばん所におはしまして、とぐちにめしよせてとり給ふを、大将、おまへのかたよりたちいで給ふ、そばめにみとほし給ひて、せちにもおぼすべかめるふみのけしきかなと、をかしさにたちとまりたまへり。ひきあけてみたまふ。くれなゐのうすやうにこまやかにかきたるべしとみゆ。 浮舟 238（「べかめる」は薫の、「べし」は勾宮の心中）

「べかめり」は直接は覚知しがたい相手の心中（「せちにおぼす」）を推定するものとして機能している。対する「べし」は眼前の、覚知可能な事象（文のさま）に対する表現主体の判断である。

⑨「なにかおぼしわづらふべき。つねの世においいでて世間の榮華にねがひまつはるるかぎりなん所せくすてがたくわれも人もおぼすべかめることなめる。かかる林のなかにおこなひつとめ給はん身はなにごとかはうらめしくもはづかしくもおぼすべき。」 手習 373（僧都→浮舟）

「べし」は、「何を思い煩うことがありましよう」と、反語表現と呼応しつつ当為を示している。ここで「おぼすべかめること」を「おぼすべきこと」とすると当為ととられかねない。また、後者は「べかめることなめる」と、「めり」が連続して出現する形となっているのも注意される。

以上の例から、

- ・べかめり・・・一般論や、他者の心中思惟の推定内容を述べ立てる
- ・べし・・・経験的な個別事態、および当為を述べ立てる

という言い分けの傾向が窺える。とりわけ、「べかめり」は事態に対する距離、ひとごと性を示すものとして機能しており、客観的な描写に傾く傾向があるのに対し、「べし」は個別事態を、②③の反語の例にみられるように時には強い情意を伴って述べ立てるのである（会話では「めり」「べし」双方との互用例が確認されたが、地では「めり」とのそれはほとんど見られない）。

以上、詞における「べかめり」の、「めり」「べし」との互用例につき、その使われ方の違いをみてきた。ここで注意を要するのは、互用例における「めり」「べし」においてはいずれも知覚可能、かつ経験的な個別事態を述べ立てる例が散見されるのに対し、「べかめり」は事態を一般化し、あるいは直接覚知しがたい他者の心中を推定する例が多くを占めるという点である。これは「べかめり」が、直接的な感覚作用によっては認知しがたい事態の述べ立てを志向することを示すものではないだろうか。

その一方で「べかめり」に対する形で用いられ、それに対して独自の領域を主張するかのように表れている「めり」「べし」の意味用法は決してそれらに固有のものではなく、前節においてみてきたように、じつは「べかめり」においても単独の例では見出し得る（「めり」における様態の描写や、「べし」における当為など）という点も注意される。ところがこれらがいったん互用例として対照し得る位置に置かれると、互いの意味領域における棲み分けが生じ、それぞれが異なる意味を発動させる。ここで思い合わされるのは漢詩文の句法における対異散同であり、これときわめて近い表現機構が、源氏物語の助動詞の互用例においても確認されるのである。

（次稿へ続く）

付記）

本稿での源氏物語の引用本文は岩波の新大系本に拠った。引用の例文において、巻名に続く洋数字はその頁数を示す。

注

¹ 一例を挙げると、

心にくくもてかしづき給ふ姫君たちを、さるは、心ざしことに、いかでと思ひきこえ給ふべかめれど、宮ぞ、いかなるにかあらむ、御心もとめ給はざりける。
竹河 290

上の例では条件節中の「べかめれど」と文末の「ける」が対照叙法として叙述上の遠近法を形成している。

² 例えば、

さりとしてたちどまるべくおぼしなるにはかくこよなきさまにみな思ひくたすべかめるもやすからず、つりするあまのうけなれやとおきふしおぼしわづらふけにや、 葵 300

などがこの例に相当するであろう。

³ もちろん、巻内部における語の近接度、出現分布の偏りも考慮に入れねばならない。例えば蜻蛉の巻では、巻中の4例全てが新大系本で54頁あるうちの最後の5頁に集中して現れている。今試みに、表3に挙げた頻度を示す数値に1000を乗じて得られたデータを折れ線グラフ化してみると、第二部で落ち込み第三部で橋姫を頂点とした山形を描いている。

4 そもそも一般化された事態は全体を直接に覚知できぬものであり、したがってそれが(推量の余地が殆ど存在しない)既実現かつ自明の事態であったとしても、話し手は推量の助動詞を用いて述べ立てるしかないであろう。一方でそこに、他の実現可能性のある事態が選択肢として意識されると γ ②の設想に、さらに述べ立て事態に対して表現主体の確信的価値判断がなされると γ ③の当為となる。

5 ちなみに、δ) ②と同様の「めり」の用法は歌合判詞にしばしばみられるものである。

判云、左歌、方人の難、条々侍めれど、みせばや富士の峯にまがへたと云へる姿・詞こそ、艶に侍めれ。右歌も、末の句などすがた優に侍るべし。 六百番歌合 958

ここで、判詞における判者の判断表明に「べし」「めり」が現れていることに注意したい。

参考までに各項に相当する例を挙げておく。

α - ①

「このわたりに、おぼえなくて、をりをりほのめく箏の琴のねこそ、心えたるにやときくをり侍れど、心とどめてなどもあらで、ひさしうなりにけりや。心にまかせて、おのおのかき鳴らすべかめるは。川浪ばかりやうちあはすらむ。」
橋姫 328 (八宮→薫)

α - ②

「やがて、さも御心づかひせさせ給ひつべからむ夜、ここにも人知れず思ひかまへてなむ、聞こえさすべかめる。」 浮舟 252 (侍従→大夫)

β - ①

あはれに心すごきものゝ、かたはしをかきならしてやみたまひぬれば、うらめしきまでおぼゆれど、「すきずきしさを、さまさまにひきいでも御覧ぜられぬかな、秋の夜ふかし侍らんもむかしのとがめやとはばかりてなむまかで侍りぬべかめる。」 横笛 56 (夕霧→御息所)

β - ②

「すい給へるやうに人はきこえなすべかめれど、心のそこあやしくふかうおはする宮なり。」 椎本 368 (薫→大君)

β - ③

「なにごとも心やすきほどの人こそみだりがはしうともかくもはべべかめれ、こなたをもそなたをもさまさま人のきこえなやまさむ、ただならむよりはあぢきなきを、なだらかにやうやう人めをもならすなむよきことにははべるべき」と申し給へば、 行幸 80 (源氏→内大臣)

γ - ①

「いとさばかりにはみたてまつらぬ御心ばへを、いどこよなくもにくみたまふべかめるかな、」となげきたまひて 胡蝶 798・418 (源氏→玉かつら)

γ - ②

御みもとどめたまへば、わが御うへをぞいふ。「かしこがり給へど人のおやよ、おのづからをれたることこそいでくべかめれ、子をしるといふはそらごとな

めり」などぞつきしろふ。をとめ 681・294（女房たちの会話を内大臣が立ち聞く）

「をかしの人御にほひや。をりつれば、とかやいふやうに、驚もたづね来ぬべかめり、」などわづらはしがるわかき人もあり。宿木 105（わかき人が互いに）

γ - ③

「なかなかなるほどに、承りさしつること多かる残りは、今少しおもなれてこそは、恨み聞こえさすべかめれ。」橋姫 321（薫→大君）

δ - ①

「その人とはさらにえ思ひえ侍らず。人にいみじくかくれしのぶるけしきになむみえ侍るを、つれづれなるままに南のはじとみあるなかやにわたりきつつ、車のおとすればわかきものどものぞきなどすべかめるに、このしうとおぼしきもはひわたる時ははべかめる。」夕顔 111（惟光→源氏）

δ - ②

「むかしのけさうのをかしきいどみには、あだ人といふいつもじをやすめ所にうちおきて、ことのはのつづき、たよりある心ちすべかめり、」などわらひ給ふ。玉鬘 370（源氏→紫上）

⁶ 例えば、Ⅰは厳密には、「α ①既実現 ∧ β ①一般事象 ∧ γ ①事態描写～②設想 ∧ δ ①事態との距離確保」の表出例と定式化することができる。Ⅱ以下についても同様の定式化を行うと、

Ⅱ α ①既実現 ∧ β ②-1 ひとつと ∧ γ ①事態描写 ∧ δ ①事態との距離確保

Ⅲ α ①/②既実現/未実現事態 ∧ β ②-1 ひとつと ∧ γ ③当為

∧ δ ②独善的断定回避

Ⅳ α ②未実現事態 ∧ β ②-1 ひとつと ∧ γ ②設想 ∧ δ ②独善的断定回避

Ⅴ α ②未実現事態 ∧ β ②-2 わがこと ∧ γ ③当為 ∧ δ ②独善的断定回避

以上のようになる。このあたり、やや煩瑣な論証となったが、複合辞の語義用法の解明にあたっては、このように徹底して分析的にみることが重要であると考え。

⁷ ここでの「相手」とは、直接の伝達の対象として話し手が意識している人物であり、自身の談話内容が伝わることを想定していない（立ち聞き、盗み聞きの場合など）人物は「聞き手」として明確に区別されるべきである（これについては永野賢 1952 を参照）。それはまた、話し手の意図せざる「聞き手」の立ち聞きなどによって事態が思わぬ展開を見せることの多い、平安朝の物語文学作品の分析においては極めて有用な概念となるであろう。

参考文献

- 中西宇一（1969）『『べし』の推定性—様相と推定と意志—』『萬葉』71
（のち中西宇一（1996）『古代語文法論 助動詞篇』和泉書院に所収）
永野賢『『相手』という概念について—宇野義方氏『国語の場面』への反批判』
『国語学』9 pp.23-28
三宅清（2022）「複合辞ベカメリについて—証拠性の変質」『國學院雑誌』123
山田孝雄（1936）『日本文法学概論』寶文館